

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【1】名古屋の古き道

1 古道あるき・古道さがし

昨年は中山道ができて400年ということで、各地で街道や宿場を訪ねるイベントが繰り広げられました。一昨年は東海道が400年と、このところイベントに誘われてか、街道あるきが人気になっています。

しかし、その自分の住んでいる足元近くに街道があり古道があることを知らない人は、案外多いのではないのでしょうか。実は数年前までは、私もその一人でした。

ある日、古本屋で立ち見をしていた本の中に、古代の東海道が瑞穂区の山崎川のそばを通過していた、という説を目にしました。私の家はその近くにあります。

古代の東海道といえば、私にとっては日本武尊の駆け抜けた道であり、万葉の歌人の通り過ぎた道です。急に歴史が身近になって、思わずその本を握り締めることになりました。(図1)

*

この東海の地は、わが国を東西に分ける拠点であり、東海道、東山道はもとより、有史以来様々な道が張り巡らされてきました。どこを歩いても、そこに、かつて何かの道があったといえるかもしれません。

もちろん、その跡が残っていることはあまり期待できません。が、なかったとしても、仮に日本武尊(もちろん伝説上の人物です)が駆け抜けたというロマンがあれば、道は現在と歴史を結び付けてくれることになります。

以来私は古道がよそ事ではなくなりました。地図を見れば古い道を探し、昔の道の姿や通りぬけた昔の人々をイメージするようになりました。そして、そこから私の古道へのこだわりが始まることになりました。

2 名古屋の古道・街道

(1) 古代の道

名古屋にはどんな古道があるのでしょうか。古くは、神話時代になりますが、先ほど述べた

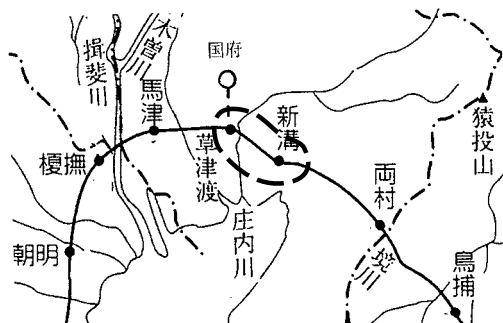


図1 名古屋付近の古代東海道ルート

日本武尊の東征伝説です。大和政権が東国を支配していく段階では、神話通りではなくても、相当の軍隊を動かすことのできる道があったにちがいません。この地方でも、熱田から東国に向けて、少なくとも海沿いの道と山沿いの道は有ったのだらうと思います。

*

時代が下がって律令時代になると、五畿七道が定められ、この地方は東海道に属しました。律令制による交通制度には、通信を担った「駅制」と輸送を担った「伝制」がありましたが、駅制による道は現在の高速道路にも似て道幅も広く、まっすぐに伸びていたといえます。

現在から見ると、古道と言えば細くて曲がりくねっていると思いがちです。けれども、なんと7～8世紀、今から1,300年も前の道路が国府と国府を広幅員、直線で結んでいたと、全国で掘り出される古代道路遺跡が証明しつづあります。

*

それではその駅路の東海道はこの名古屋のどこを通過していたのでしょうか。驚くべきことに、その広幅員の直線道路が市内に痕跡を残してい

ます。

図2は明治24年測量の陸地測量部の地図です。図中の▲は古代交通研究会会長の木下良先生が付けられたものですが、それらを結んだ線が古代の東海道だとの指摘です。

古代の東海道は、この付近では桑名方面から名古屋の北西、甚目寺町の萱津で国府のあった稲沢への道を分け、名古屋を横切って中区の古渡付近を通り、緑区から豊明市の二村山方面にぬけたというのが定説になっています。(図1) この▲をつなぐ線はまさにその線上にあることになります。

木下先生はさらに、明治17年の地籍図によってその直線道路を裏付けるとともに、その幅員は15、6mではなかったかと推察されています。(図3)

もちろんこの道路の跡は、その後に行われた区画整理によって跡形も無くなりました。しかし、ここを古代の道路が通っていたということは、この指摘でかなりはっきりと示されているように思えます。

(2)中世の道

時代は下がって、鎌倉・室町時代の道はどん

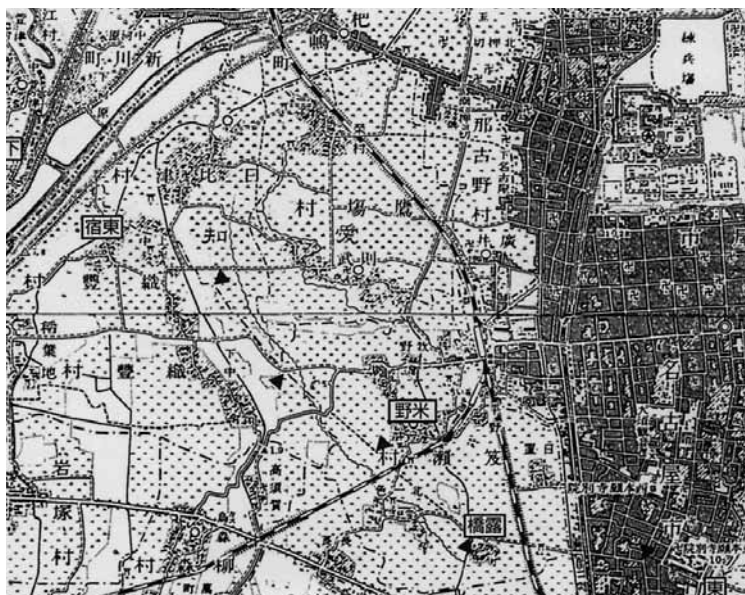


図2 明治24年の地図にのこる古代道路跡
(---▲---)



図3 米野村地籍図にみる直線道路

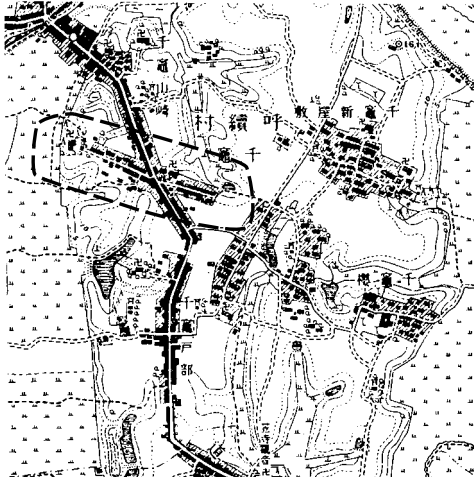


図4 明治の地図に残る鎌倉街道跡



地藏堂湯浴地藏(鑄鉄)座像

なものだったのでしょうか。鎌倉時代は幕府のあった鎌倉から各地に放射状に道が出来ていたといいますが、この地方に関係するものとしては京と鎌倉を結ぶ鎌倉街道(京・鎌倉往還)です。

この時代になると紀行文などからその状況も垣間見ることができ、現にその跡といわれるものが各地に残っています。名古屋市内にもいくつかありますが、中でも有名なのは南区の呼続から桜本町にかけての道です。

鎌倉街道は、市内では古代の道と同じように、市の北西の萱津から、中区の古渡を通り、南西の二村山へと市内を横断したとされています。



細く長くつづく古道跡

しかし南区のあたりは時代によってもいくつかのルートがあったようです。

桜本町を通る道は、明治24年の地図にも出ていて、わずか500メートルくらいですが東西に伸び、西側は段差で切れたような道になっています。

(図4)

この道は、地下鉄桜本町駅のすぐ近くで、駅の3番出入口を出てすぐを西に入ると名鉄本線の踏切がありますが、これを渡って西北西にまっすぐ伸びる道です。幅は3メートル弱。9尺道というのでしょうか。江戸時代以降は街道ではなかったため、周りは現代の住宅ばかりで、古道らしさはありません。

西に進むと中ほどで江戸時代の東海道と交差しますが、この手前に道に沿って黄竜寺と地藏院があります。前者は室町時代の創建とされますが、後者は鎌倉時代に鑄造されたという鉄のお地藏さんで湯浴地藏といわれています。戦災等で傷んでしまい、頭と両掌に原形をとどめるのみです。鎌倉街道とは関わりがあるのでしょうか。

さて、東海道を過ぎて西に向かうと、また静かな住宅地の中の道になります。少し行くと正面にお寺が見えてきます。白毫寺で、街道はその右手に坂を下って行きます。白毫寺は江戸時代の創建ですが、境内の向こう側は当時海だったため、「年魚市(あゆち)湯勝景地」の碑が立っています。この辺の笠寺台地の10メートル近い段差のため、鎌倉時代は入り江を見渡す景勝地だったのでしょう。街道は寺の右の坂を下った所から、船で熱田や瑞穂区の井戸田に渡ったといえます。

(3)近世・近代の道
時代はさらに下がって、近世・近代に入りま

す。江戸時代、明治時代の道は今もいろんな所に残っています。幕府の管理した道、藩の管理した道を始め、様々な物を運んだ道、寺社への参拝や巡礼の道など、400年の歴史とともにたくさんの道が街の中に埋め込まれています。

次回からは、順を追って、それらのいくつかを訪ねてみることにしたいと思います。

3 古道さがし・古道あるき

古道をあるく楽しみとは何でしょうか。ひとつは、その街の歴史が分かってくることでしょう。古道をさがし、あるくことによって、思わぬ街の発見をすることがあります。昔は海だったとか、川はこちらを流れていたとか、現道は裏道だった…などと。

しかしもうひとつ大切にしたいことは、古道を歩くということが自然にその身を歴史の中に置くことになることです。過去から現在を見ることによって、観光地を歩いたり、文化財を訪ねたりするのは違う、「盛衰」という厳しい現実をまのあたりにすることになるからです。



左白毫寺、右古道跡



年魚市湯勝景碑

古道を歩いて、そこには見るべき物が何もなければなりません。しかし、それだからこそ、ゾッとするような無常感にうたれるときがあるのです。

いにしへの みに隠れし 春ありて

〈参考文献〉

・この文を書くに当たっては、いろんな本の知識をお借りしています。その中でも、直接参照させて頂いたものは次の通りです。

①森浩一、門脇禎二編「旅の古代史」

(大巧社1999)

・記念講演「古代の交通制度と道路」木下良

②三渡俊一郎「南区の歴史」

(愛知県郷土資料刊行会1986)



笠寺台地の段差、昔はこちら側は海だった

編集部より

今月から池田誠一(いけだせいいち)先生にお願いして新連載を開始しました。先生は昭和18年8月生で名古屋大の土木工学科を卒業し、名古屋市役所に入られ交通局、総務局等を経て、現在、名古屋都市センターに在職されております。

数年前から、NPO 白壁アカデミアの世話人で、古道講座を担当していらっしゃいます。